

# 教師の 腕前診断

今回のテーマ

## しっかりと不登校を させよう(1)

昨日まで無遅刻・無欠席だった優秀な子どもが欠席しています。連絡帳には「体の調子が悪い」と書いてあります。

担任は休み時間に見舞いの電話を入れました。すると、意外な一言を母親から聞かされました。「学校に行きたくない」と言っているのです。

母親は学校で何かあったのではないかと心配しますが、担任に思い当たる節はありません。この日から不登校が始まりました。

### 1 構えが大事

不登校ではないかと担任は判断しました。放課後には家庭訪問をするつもりです。何を話そうか、どんなアドバイスを求められるのかと心の準備をします。

### Q1

担任は不登校に対してどんな構えを持って接すればいいでしょうか？

- ① しっかりと不登校をさせる
- ② 一日も早く登校させる

「①」の「しっかりと不登校をさせる」です。

学校には行かなければならない。でも、腹痛・頭痛・微熱などが登校を拒否してしまう真面目な子ども。不登校ではないかと心配し、我が子の登校を促したいと思っている常識的な保護者。いつも明るく、運動や勉強でも活躍し、面倒みのいいあの子が、と信じられない気持ちの担任。今回の事例は、このような想定です。文句のつけようのない「良い子」が不登校になってしまいました。「良い子」だから不登

校になったともいえます。不登校は今までの積もり積もった心の負担が目に見えるようになった状態です。コップに注いだ水が満杯になり、溢れ出してしまったのです。心のキャパシティを超えてしまったのです。

外見は元気です。ですが、心が疲れていきます。心が風邪をひいたのです。風邪をひいたら安静と栄養が必要です。無理は禁物です。しっかりと安静、つまり、欠席させることです。安静は、「価値ある欠席」です。

栄養となるのは、適切な大人の関わり方です。思い込みを捨て、寛容な接し方に変えることです。「チェンジ」する勇気です。

### 2 居心地の良い場所に人は集まる

不登校になると毎日自宅にいます。場合によっては勉強部屋にこもってしまいます。

### Q2

どうして不登校の場として家庭を選ぶのでしょうか？

- ① わがままが通るから
- ② 安心できるから

「②」の「安心できるから」です。

私は2週間も発熱が続いたことがあります。病院に行くと「風邪」という診断です。

平日の昼間は薬で症状を押さえながら仕事をしていました。夜や休日は気力が衰えて布団に臥していました。

薬を飲んでも症状が良くならないので、病院を変えました。3人目のドクターが肝臓の専門家。「これは風邪ではありません。ウイルスによって肝機能障害をおこしています」と

診断され、すぐに入院しました。

元気な人間にとって入院は喜ばしいことではないのですが、この時はやはり安堵です。病名がわかり、治療に専念できます。発熱を押して仕事をしなくて済みます。「もう頑張らなくてもいい」と心の負担から解放され、救われた気分になりました。入院してもしばらくは高熱が続きましたが、ドクターやナースの顔を見ると「この人たちが治してくれる」という安心感から「治る」と確信を持って、「治そう」という気力が湧いてきました。

3日後には平熱に戻り、肝機能が正常に戻るのを待つほどに回復しました。そうなるまで寝ている生活が苦痛になってきます。退屈なのです。職場に行きたくてしかたがないのです。1週間後には退院できました。

完治したという喜びよりも入院できた安堵感の方が、今でも鮮明に記憶に残っています。



不登校は心の風邪だと言いました。病気になるとうまく休める場所が必要となります。不登校になり、過ごす場所を家庭に選んだということ、その居心地が一番良かったと

いうことです。家族と接している時間に安心感を持てるのです。私の入院のケースではドクターやナースでしょう。逆に、問題行動をおこす子どもは、コンビニの駐車場など家庭外にそれを求めます。そこに行けば、わかり合える仲間と出会えるからです。

せっかく、選んでもらった家庭です。うんと安心できる環境を作ってあげるべきです。

### 3 保護者が「チェンジ」

ゆつくりと不登校させるということはわかりました。また、1で「チェンジ」することが大切だと書いてありました。

## Q3 では、最も「チェンジ」すべきなのは誰でしょうか？

- ① 担任
- ② カウンセラーなどの専門家
- ③ 保護者

「③」の「保護者」です。

居心地が良い場所、安心できる人がいる場所です。不登校になると書きました。その考えからすると保護者が「チェンジ」という発想は矛盾しているように思えます。

ところが、そうではないのです。私は4年間、不登校対策教員として勤務したことがあります。勤務した学校は不登校児童が毎年何人かいました。週に12時間ほど授業をし、残りの時間は不登校児のために費やします。

この経験から言えることは、「不登校児は保護者が作る」ということです。保護者は否定するでしょうが、間違いなくそうです。

心のキャパシティを超えるほど頑張る子どもに育てたのは保護者です。一番身近にいなから心の負担を感じてやれなかったのは保護者です。子どもが不登校という症状を示しても、世間や親戚の目を気にして学校に行かせようとするのも保護者です。

不登校の原因を知らなくても「何かおかしい。変だ？」と薄々気づいていたはず。その結果、原因を他者に求めます。

しかし、責任転嫁しても我が子の不登校は解消されません。原因を他に求めますが、現状は変わりません。それどころか、不登校がひきこもりへとさらに深刻になることもあります。

そうになると、保護者の心の負担が増えます。キャパシティを超えてしまいます。これは当たり前前のことです。そうになると「明るい不登校」を受け入れようとは思えません。

「チェンジ」する機会を逸するとますます泥沼化します。そうならないように周りが支援してあげるのです。

不登校児の保護者は、幸いにも不登校対策教員としての私の存在を頼ってくれました。

### 4 最初の家庭訪問

意を決して家庭訪問をします。呼び鈴を鳴らします。玄関のドアを開けるのは間違いなく保護者です。子どもは奥の部屋に引っ込みます。病気でもないのに欠席した、ずる休みをしたという罪悪感を持っているからです。また、それがばれることを恐れて担任と顔を合わせようとしません。

子どもには自分が不登校だという認識がまだありません。

## Q4

顔を合わせた保護者に、開口一番どんな言葉をかけますか？

- ① 思い当たる原因は？
- ② びつくりしたでしょう
- ③ 今日の様子は？

「②」の「びつくりしたでしょう」です。

「共感」という言葉があります。これは相手の気持ちになる、ということ。不登校かもしれない」という悶々とした悩みを抱えて「不登校初日」を終えようとしている保護者です。「不登校ではありませんように」と手を合わせていたことでしょう。親の思いとは裏腹にあっけらかんとしている我が子を理解できずにいたことでしょう。

そういう保護者の思いを汲み取ります。すると、かける言葉は限られます。

「まさか我が子が『学校に行きたくない』と言うとは思ってもよらないことですよね」「信じられないですよね」「これからどうしようって考えてしまいますよね」と声をかけます。

すると、堰を切ったように保護者が今日一日のことを喋り始めます。薬にもすがるように話し始めます。

母親に気づかれないように玄関から奥を見ると、子どもが部屋の隙間からこちらの様子を伺っています。

不登校児との関わりが始まります。保護者はすぐに不登校が解消されると思っっているでしょうが、時間をかけて子どもや保護者を「チェンジ」させていきます。

※次号に続きます。